平成 16(2004)年 7 月～12 月**長期漁況海況予報**平成 16(2004)年 7 月発行

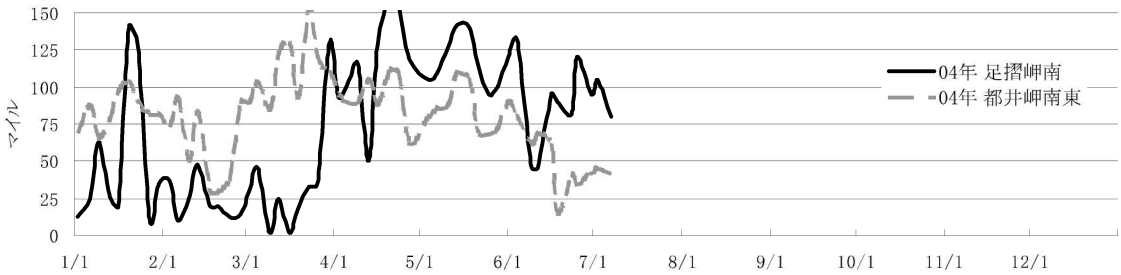
大分県海洋水産研究センター　879-2602 大分県南海部郡上浦町大字津井浦
Phone0972-32-2155　Fax.0972-32-2156　http://www.mfs.pref.oita.jp

海況経過<平成 16 年前期>

■黒潮

平成 15 年 11 月下旬～16 年 2 月上旬、九州南東沖に小蛇行が停滞し、2 月中旬～3 月中旬、四国沖を東進しました。2 月下旬、九州南東沖に新たな小蛇行が形成され、4 月～5 月、四国沖で停滞・発達し、その東端は 4 月下旬に室戸岬沖、5 月下旬に潮岬沖に達しました。なお、この小蛇行は 7 月上旬、潮岬沖を東進しています。

黒潮北縁と都井岬との距離の状況は、2 月中旬、6 月中旬に一時的に接岸となった他は、期間を通して離岸しました。足摺岬との距離の状況は、3 月までは離接岸を繰り返しましたが、4月以降、離岸しました(図1)。



足摺岬：接岸 0～25 マイル　やや離岸 25～45 マイル　　都井岬：接岸 0～30 マイル　やや離岸 30～50 マイル

図 1　足摺岬南及び都井岬南東方向の黒潮北縁までの距離(南西東海沿岸海況速報による)

■水温

豊後水道の水温(0m、10m、20m、30m、50m及び75m層)は、期間を通して概ね「平年並」～「やや高め」傾向でしたが、豊後水道中部の3月が「高め」傾向、北部の4月が「高め」～「きわめて高め」となりました(表1)。

伊予灘と別府湾の水温(0m、10m、20m、30m 及び50m層)は、期間を通して概ね「平年並」～「やや高め」傾向でしたが、伊予灘の5月が「やや高め」～「高め」となりました(表2)。

■塩分

豊後水道の塩分は、期間を通して概ね「平年並」～「やや高め」傾向でした。

伊予灘と別府湾の塩分は、期間を通して概ね「平年並」～「やや高め」傾向でした。

表 1　水温の平年偏差評価（豊後水道 2004 年）

		1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
（北部）	0m	＋－	＋－	＋	＋＋	＋－	＋－
	10m	＋－	＋	＋	＋＋	＋	＋－
	20m	＋－	＋－	＋	＋＋	＋	＋－
	30m	＋－	＋	＋－	＋＋＋	＋	＋－
	50m	＋－	＋	＋	＋＋＋	＋	＋
	75m	＋－	＋－	＋－	＋＋	＋－	＋
（中部）	0m	＋－	＋－	＋＋	＋	＋－	＋－
	10m	＋－	＋－	＋＋	＋	＋－	＋
	20m	＋－	＋－	＋＋	＋	＋－	＋
	30m	＋－	＋－	＋	＋	＋	＋＋
	50m	＋－	＋－	＋＋	＋＋	＋	＋
	75m	＋	＋	＋	＋＋	＋	＋
（南部）	0m	＋	－＋	＋＋	＋－	－＋	＋
	10m	＋	－＋	＋	＋－	＋－	＋
	20m	＋	－＋	＋	＋－	＋－	＋
	30m	＋	－＋	＋	＋－	＋－	＋
	50m	＋	＋－	＋	＋	＋	＋
	75m	＋	＋	＋	＋＋	＋＋	＋＋

表 2　水温の平年偏差評価（伊予灘・別府湾 2004 年）

		1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月
（伊予灘）	0m	＋	＋－	＋－	＋	＋	＋－
	10m	＋	＋	＋－	＋	＋	＋－
	20m	＋	＋	＋－	＋	＋＋	＋－
	30m	＋	＋	＋	＋	＋＋	＋－
	50m	＋	＋	＋	＋	＋＋	＋－
（別府湾）	0m	＋	＋－	＋－	－＋	＋	＋－
	10m	＋	＋	＋－	＋－	＋	－＋
	20m	＋	＋	＋－	＋－	＋	＋－
	30m	＋	＋	＋－	＋－	＋	＋－

注)＋＋＋:きわめて高め　＋＋:高め　＋:やや高め　＋－:高めの平年並
－＋:低めの平年並　－:やや低め　－－:低め　－－－:きわめて低め

海況の見通し＜平成 16 年後期＞

■黒潮

九州南東沖では 7 月～10 月は接岸傾向で推移しますが、11 月以降は離岸傾向となるでしょう。黒潮の小規模な離接岸変動に伴って、沿岸域へ一時的に暖水が波及することがあるでしょう。

■水温

「平年並」～「高め」でしょう。

■予測の根拠

中央水産研究所及び関係府県:平成16年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報会議資料(2004)
気象庁気候・海洋気象部:平成 16 年夏季の北西太平洋の海面水温予報(2004)
神戸海洋気象台:平成 16 年夏季の南日本海区の海面水温予報(2004)
福岡管区気象台:九州北部地方 3 か月予報(2004)

資源状況と漁況経過＜平成 16 年前期＞

■マイワシ

■ 昨年までの経過

大分県漁協鶴見、米水津及び蒲江支店のまき網（特にことわりのない限り、まき網についての数値は、この3支店に関するもの）によるマイワシの漁獲量は、1986年以降の1990年までの間は、年間30,000トン前後あり、その大半は3月から7月に漁獲される体長15cm以上の「中羽」以上でした。1991年以降、「中羽」以上は減少傾向となり、一方、7月から9月に主に漁獲される体長10cm前後の「小羽」も、1993年に、一旦、増加しましたが、その後は低調に推移しました。全銘柄の漁獲量は1998年まで8年連続で減少し、1999年は前年に比べ僅かながら増加しましたが、2000年は再び減少しました。そして、2001年は1月下旬から2月中旬にかけてまとまった漁獲があり、約1,750トンと5年ぶりに1,000トンの水準を超えました。しかしながら、2002年は約1トンと過去最低値を記録し、2003年も約90トンと大低迷しました（図2）。

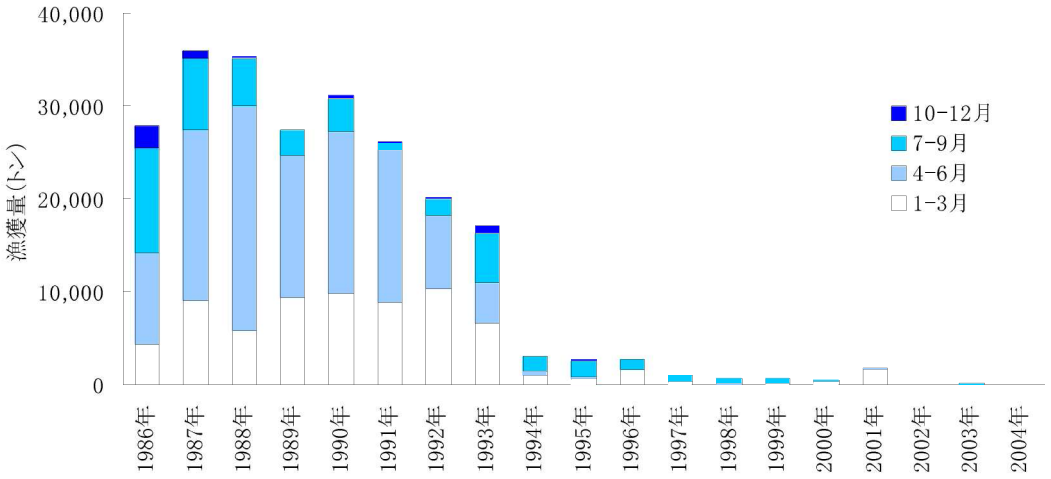


図2　マイワシのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

■ 本年の経過

2004年前半の月別漁獲量は、1～3月は0.4トン、4～6月は0.1トンと著しい不漁が継続し、この時期の漁獲としては過去最低値を記録しました。

■カタクチイワシ（成魚）

■ 昨年までの経過

まき網によるカタクチイワシの漁獲量は、これまで一年毎に増加と減少を繰り返しており、漁獲の多い年（偶数年）で2,000～3,000トン程度、漁獲の少ない年（奇数年）で1,000トン前後の漁獲となっていました。しかしながら、1999年には1月中旬から7月中旬にかけて豊漁が続き、過去最高の漁獲となりました。平年の漁期は6月から9月までが中心であり、1999年は漁獲量及び漁期とも特異的な年となりました。そして、2000年は約2,100トン、2001年は約2,800トン

と比較的高水準となりましたが、2002年は約1,500トン、2003年は約1,400トンと2年連続して減少しました(図3)。

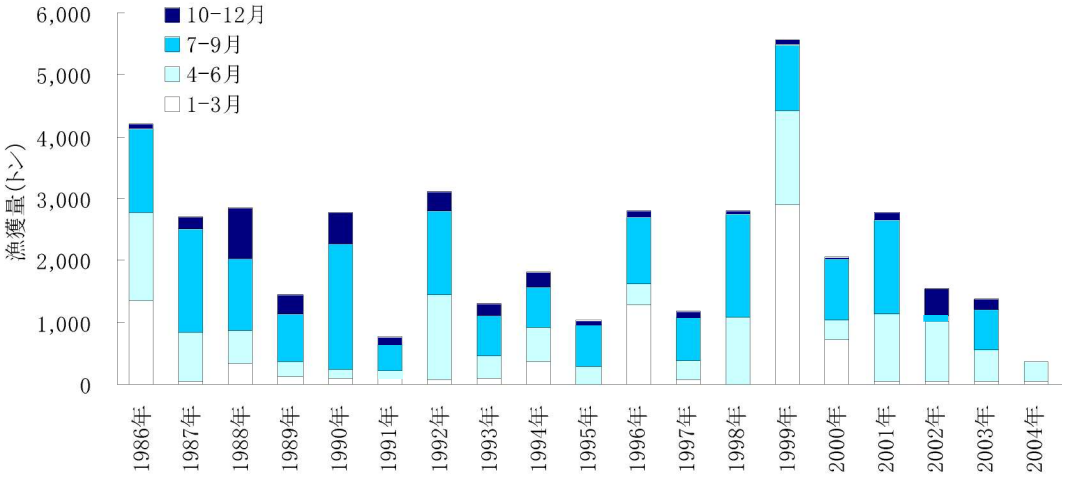


図3　カタクチイワシのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

■ 本年の経過

2004年前半の月別漁獲量は、各月1～209トン、平年比0～51%となりました(以下、まき網の平年値を1986～2003年の平均漁獲量とする)。このうち、1～3月は36トン、平年比8%と低迷し、4～6月は317トン、平年比47%となりました。

■カタクチイワシ(シラス)

■ 昨年までの経過

佐伯湾(佐伯・鶴見)の船曳網によるシラスの漁獲量は、1992年に約530トンの最高値を記録した後は、減少傾向となり、1995年には200トンを割り込みましたが、その後は、1993年以前の水準には及ばないものの増加傾向を示しました。しかしながら、2001年は約160トンと過去最低値を記録し、2002年も約210トンの低水準となりました。そして、2003年は高水準に転じ、約330トンと増加しました。

別府湾(杵築・日出)では、1990年以降1,200～2,200トンの範囲で変動しましたが、1998年の漁獲量は、1990年以降初めて1,000トンを割り、約750トンと過去最低値を記録しました。1999年以降は再び1,000トンを超える水準となりましたが、減少傾向を示し、2002年は約870トンと再び1,000トンを割り込みました。そして、2003年は約1,120トンと比較的高水準に戻りました。

臼杵・津久見湾では、1991年以降0～106トンの範囲で大きく変動しており、2003年は0.3トンで、平年比1%となりました(以下、船曳網の平年値を1991～2003年の平均漁獲量とする)。

《 推計方法:別府湾の漁獲量＝製品(ちりめん)重量×2.514、 豊後水道の漁獲量＝製品(ちりめん)重量×2.380 》

■ 本年の経過

2004年前半の月別漁獲量は、佐伯湾では1～3月は8トン、平年比37%、4～6月は32トン、平年比35%と低調でし

た。

別府湾では1～3月は57トン、平年比47%、4～6月は100トン、平年比30%と低調でした。

臼杵・津久見湾では期間中ほとんど漁獲がありませんでした。

■ウルメイワシ

■昨年までの経過

まき網によるウルメイワシの漁獲量は、1986年以降100～300トン程度でしたが、1992年以降は増加傾向を示し、1996年には約2,300トンまで達しました。しかしながら、1997年以降は減少傾向に転じ、2002年は約35トンと過去最低値を記録し、2003年も約320トンと低迷しました(図4)。漁獲は夏期の6～8月が中心でしたが、近年は冬期の1～3月にもまとまった漁獲がみられました。

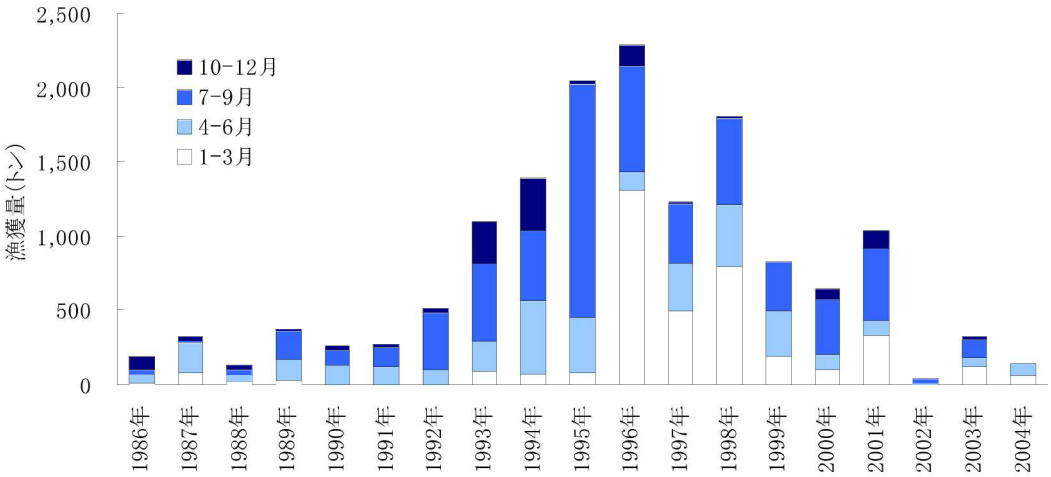


図4　ウルメイワシのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

■ 本年の経過

2004年前半の月別漁獲量は、各月0～59トン、平年比0～93%となりました。このうち、1～3月は61トン、平年比29%、4～6月は80トン、平年比43%と低調でした。3月は平年並み(59トン、平年比93%)の漁獲となりましたが、他の月は平年を大きく下回りました。

■マアジ

■ 昨年までの経過

まき網によるマアジの漁獲量は、1986年以降減少傾向を示し、1991年に1,000トンを割り込みましたが、1992年以降は増加傾向に転じており、1998年には約7,500トンの漁獲量で、過去最高値を記録しました。しかしながら、1999年以降は2,000～4,000トン程度の水準に下がり、2001年は年前半の不漁により約2,270トン、2002年は約3,800トン、2003

年は約1,990トンとなりました(図5)。

また、佐賀関支店の釣りを中心とするマアジの漁獲量は、1988年以降増加傾向が継続し、1999年には248トンに達し、過去最高値を記録しました。しかしながら、2000年は一転して170トン(平年比82%)と落ち込みました(以下、佐賀関支店の平年値を1988～2003年の平均漁獲量とする)。そして、2001年は196トン、2002年は210トン、2003年は215トン(平年比104%)と再び増加傾向となりました。

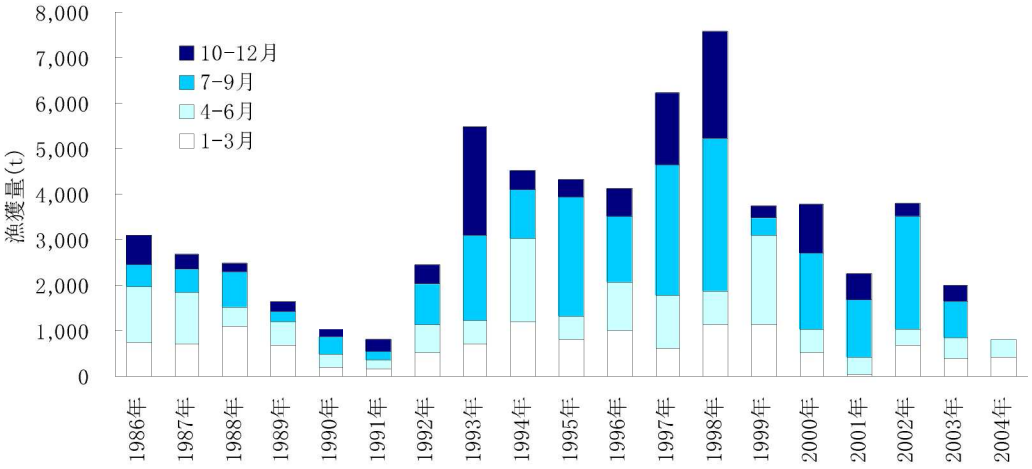


図5　マアジのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

■ 本年の経過

まき網の2004年前半の月別漁獲量は、各月65～210トン、平年比25～101%となりました。このうち、1～3月は427トン、平年比62%、4～6月は390トン、平年比51%と低調でした。但し、5月までは平年を下回る漁獲が継続しましたが、6月は平年並み(201トン、平年比101%)の漁獲へと好転しました。

佐賀関支店の月別漁獲量は、1～3月が66トン(平年比130%)、4～6月は56トン(平年比102%)と比較的好調でした。

■マサバ・ゴマサバ

■ 昨年までの経過

まき網による「さば類(マサバ・ゴマサバ)」の漁獲量は、1993年以降増加傾向を示し、1996年及び1997年には、それぞれ約14,000トンと約12,000トンをあげて豊漁となりましたが、1998年は一転して不漁となり、1986年以降初めて1,000トンを割り込みました。そして、1999年、2000年と低水準ながら増加傾向を示しましたが、2001年からは大低迷し、2002年は約180トンと過去最低値を記録しました。しかしながら、2003年は高水準に転じ、約5,500トンと増加しました(図6)。

「さば類」のうち、1994年以降はゴマサバが漁獲主体で、マサバの漁獲はほとんどない状況でしたが、大低迷した2001年及び2002年にはマサバの占める割合が比較的高い傾向がみられました。

また、佐賀関支店の釣りを中心とするマサバの漁獲量は、豊漁であった1992年と1993年を除き、ほぼ100～200トンの範囲で変動しました。1998年以降は120トン前後で横ばい傾向となり、2002年は148トン（平年比90％）と平年を下回りましたが、2003年は高水準に転じ、261トンと増加しました。。また、2～3年の短い周期で増減を繰り返す変動傾向もみられました。

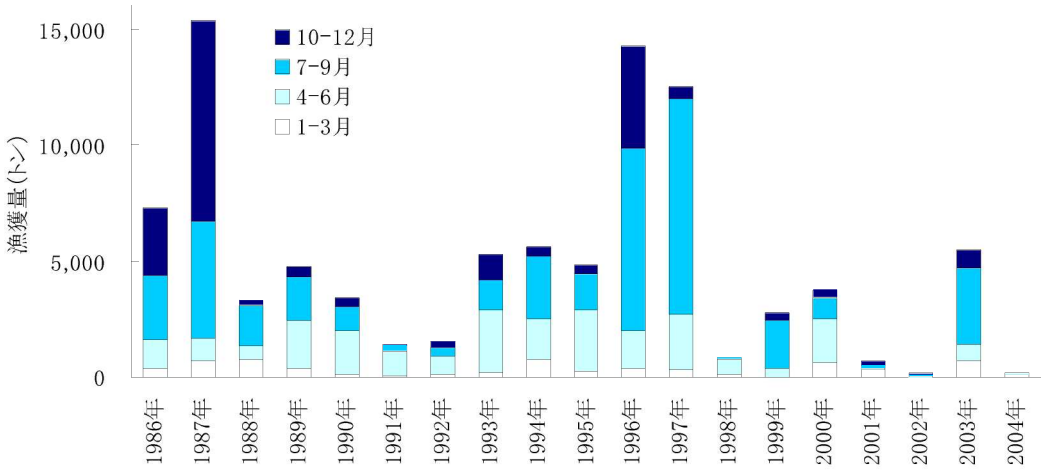


図6　マサバ・ゴマサバのまき網漁獲量（鶴見・米水津・蒲江支店）

■ 本年の経過

まき網のゴマサバを主体とする2004年前半の月別漁獲量は、各月1～71トン、平年比1～62％となりました。このうち、1～3月は107トン、平年比30％と低調で、4～6月は64トン、平年比5％とさらに落ち込みました。

佐賀関支店のマサバの月別漁獲量は、1～3月が97トン（平年比119％）と比較的好調でしたが、4～6月は10トン（平年比46％）と平年を下回りました。

漁況の見通し＜平成 16 年後期＞

■マイワシ

【太平洋系（北薩－熊野灘）の見通し】

来遊量は依然として低水準ですが、土佐湾、紀伊水道外域西部及び東部では前年を上回るでしょう。日向灘、豊後水道、熊野灘では前年並みか前年を下回るでしょう。

[説明]資源量は 1995 年から 1999 年の間は低水準ながら比較的安定していましたが、その後減少し、2002 年以降はさらに低下したと推定されます。2004 年級群の加入量水準も幼稚魚調査の結果からは近年3年と同程度の低水準と予測されることから、漁獲対象となる各年級群はいずれも資源量の豊度が低いと考えられます。

【大分県の見通し】

漁獲量は比較的大きな周期で増加あるいは減少すると考えられ、来遊水準は直前の漁獲水準と相関が高い傾向にあります。漁況経過からみると、来遊水準は極めて低いままであり、依然として低水準でしょう。

■カタクチイワシ（成魚・シラス）

【太平洋系（北薩～紀伊水道外域西部の成魚）の見通し】

来遊量は前年並みか前年を下回るでしょう。

【太平洋系（西薩～常磐南部のシラス）の見通し】

来遊量は西薩、志布志湾では前年を上回るでしょう。日向灘、豊後水道では前年を下回るでしょう。土佐湾～紀伊水道外域では前年並みか前年を下回るでしょう。紀伊水道、伊勢湾、渥美外海では前年を下回るでしょう。遠州灘、駿河湾、相模湾、常磐南部では前年並みでしょう。

[説明]資源水準は高位で、横ばい傾向にあると考えられます。2002 年級群の豊度は高いが、残存量はそれほど多くないと推定されます。2003 年級群の豊度は 2002 年級群には及ばないものの近年の高水準を維持していると推定されます。2004 年級群は1～6月の本州太平洋岸における卵稚仔の出現状況がほぼ前年並みであることから、その豊度は高水準が期待されますが、今漁期の漁場への出現については注視する必要があります。

【大分県の見通し】

成魚については、漁況経過からみると、5月以降、小サイズ（じゃみ等）にまとまった漁獲はみられますが、全体としては、平年を下回る漁獲が継続しており、来遊水準は低いと考えられ、前年並みで、平年を下回るでしょう。

また、シラスについては、漁況経過からみると、佐伯湾、別府湾ともに4月を除き平年を下回る漁獲となっており、来遊水準は低いと考えられ、前年、平年を下回るでしょう。

■ウルメイワシ

【太平洋系（北薩－熊野灘）の見通し】

来遊量は北薩、薩南では前年を上回るでしょう。日向灘では前年並みか前年をやや上回るでしょう。豊後水道では前年並みでしょう。土佐湾では前年並みか前年を上回るでしょう。紀伊水道外域西部では前年並みの低水準でしょう。紀伊水道外域東部では平年並でしょう。熊野灘では前年を下回るでしょう。

[説明]資源量の指標となる産卵量は 2001年、2002 年と減少しましたが、2003 年は増加しました。資源水準は中位で、横ばい傾向にあると考えられます。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、来遊水準は一昨年の著しい低水準からは脱したものの、依然として低い状態にあると考えられます。また、当該時期の漁獲量は当年1～6月漁獲量と比較的高い相関（r=0.59）があり、これから推定すると約198トン（前年比147％、平年比46％）の漁獲となります。従って、総合的に判断すると、前年並みで、平年を下回るでしょう。

■マアジ

【太平洋系（北薩－日向灘・豊後水道）の見通し】

来遊量は前年を上回るでしょう。

[説明]資源水準は1986年に顕著に増加し始め、1993年から高水準となり、1997年から2000年にかけてやや低下したものの、2001年には加入量が多かったために再び高くなりました。2002年、2003年と加入量が減少し、資源水準も減少傾向にありますが、2004年の加入量はやや多い可能性があります。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、来遊水準は一昨年10月以降低い状態で推移しましたが、6月に入りやや回復の兆しが伺え、漁獲主体となる0歳魚の加入も比較的良好でした。また、当該時期の漁獲量は前々年0歳魚の推定資源尾数と比較的高い相関（r=0.65）があり、これから推定すると約1,076トン（前年比94%、平年比54%）の漁獲となります。従って、総合的に判断すると、不漁であった前年を上回り、平年を下回るでしょう。

■マサバ・ゴマサバ

【太平洋系（薩南－日向灘・豊後水道）の見通し】

来遊量はゴマサバ1歳魚は多かった前年を下回るでしょう。0歳魚と2歳以上は前年を上回るでしょう。マサバは低水準でしょう。さば類全体としては、前年を下回るでしょう。

[説明]ゴマサバの資源量は近年では1996年級群が卓越年級群であり、1999年級群がそれに準ずる年級群でした。2000年級群、2001年級群及び2002年級群の加入量は比較的安定しており、太平洋側全体としては、1999年級群より低い水準ですが、1997年級群、1998年級群と比べてかなり高いと言えます。2003年級群の加入量は極めて低い水準、2004年級群の加入量は比較的高い水準と推定されます。また、マサバの資源水準は低位で、減少傾向にあると考えられます。

【大分県の見通し】

漁況経過からみると、平年を下回る漁獲が継続しており、来遊水準は低く、減少傾向にあると考えられ、前年、平年を下回るでしょう（ゴマサバ主体）。

その他

■予測の根拠

中央水産研究所及び関係府県：平成16年度第1回太平洋イワシ・アジ・サバ等長期漁海況予報会議資料（2004）

■問い合わせ先

この予報に関する問い合わせ先は、大分県海洋水産研究センター　企画・海洋資源利用部まで

（〒879-2602　大分県南海部郡上浦町大字津井浦　電話0972-32-2155　ファクシミリ0972-32-2156　e-mail：a16411@pref.oita.lg.jp）